

怖い先生

齋藤 一（筑波大学講師）

文芸・言語研究科のイギリス文学の院生だった 10 数年前、一般文学（現：総合文学）の荒木先生といえば怖い先生の代表格であった。学問的にオソロシイということと、怒ったら怖いということである。

先生の学問のオソロシサについては、大著『ホモ・テクステチュアリス』を熟読すればわかる。もっとも、院生にとっては、この大著を熟読できるまでの力をつけるのが大変なのであり、熟読するようになったら院生ではなくなっている（つまり就職している）場合が多いような気がする。

怒ったら怖いということについては、こんな思い出がある。ある時、ある学会の事務仕事を、人社棟 5 階にあったイギ文院生室で、先輩の S さん H さんとやっていたのだが、気がゆるんでいたのだろう、その仕事の面倒くささに愚痴をこぼしていた。すると、廊下でその愚痴を耳にされたのであろう荒木先生が、猛然と院生室のドアを開け、非常な憤怒の表情を見せつつ、無言のまま、私たちの手から封筒や書類を持ち去ってしまった。私と H さんは、ただちに荒木先生の研究室にうかがい、必死に謝罪し続けた。本当に怖かった。しかし、この怖い先生のおかげで、若い院生にとっての学会の重要性と、その運営に関わることが研究する人生のトレーニングであるということが、腹の底から理解できたのである。

研究・教育組織には怖い先生が必要だ。最恐の一人であった荒木先生は、筑波にとって必要不可欠な方であったと感じることが多い今日この頃である。